

18・9 世紀ドイツの社会経済思想——高柳良治著『ヘーゲルの社会経済思想』を読む

報告者 佐山圭司（北海道教育大学）・大塚雄太（名古屋経済大学）

討論者 滝口清栄（法政大学・非常勤）

世話人 原田哲史（関西学院大学）・大塚雄太（名古屋経済大学）

参加者 約 10 名

2014 年に逝去された高柳良治先生の遺稿集『ヘーゲルの社会経済思想』（こぶし書房、2015 年）の合評を行った。本セッションは、2001 年大会において高柳氏の前著『ヘーゲル社会理論の射程』（2000 年）の合評会として始まって以来、昨年で通算 15 回を数えた。開始からおよそ 10 年にわたり深く関与した高柳氏の新著を論ずるなかで、その死を悼むとともに、セッションの歩みを振り返った。

第 1 報告（大塚）は、『ヘーゲルの社会経済思想』を中心に、前著『ヘーゲル社会理論の射程』と比較しつつ、高柳氏の研究足跡をたどった。要旨は、以下のとおりである。

前著『射程』ではヘーゲルとホップズ、ルソー、カントであったのに対し、『社会経済思想』ではヘーゲルとマルクス、リストとなり、経済色が強まっているように見える。前作に比して全体のイメージが異なることは、目次を一瞥しても明らかである。『射程』以降の研究において、大きな影響力を持ちつづけたのはプリッダートの『経済学者ヘーゲル』ではなかったか。初期マルクスからヘーゲルへというかつての全体動向および『射程』第 2 章のもととなった 1969 年の『一橋研究』の論考とによって、経済学とヘーゲルを結ぶという発想が早くから高柳氏にあったことは確かだが、とりわけ普遍的資産、身分論、税が扱われる諸論考は、『経済学者ヘーゲル』のつよい影響を想像させる。

学術的作品は上記 2 冊にすべて収録されているが、「アリストテレスからアダム・スミスへ—経済思想史入門」（1997 年）というプリッダート講演の翻訳は『社会経済思想』にも未収録となった。「解題に代えて」によれば、高柳氏はこれを新稿「ヘーゲルとスミス」と並べるつもりであった。『経済学者ヘーゲル』では、ヘーゲルにおけるアリストテレスの痕跡が発掘・指摘される一方、ヘーゲルのスミス受容は限定的なものにすぎないという論調によって、アリストテレスとスミスとを直接つなぐ記述はみられない。講演の翻訳には、アリストテレスとスミスは経済学的観点からすれば、別次元に立つというプリッダートの考えが明示されている。したがって、高柳氏が用意しようとした「ヘーゲルとスミス」という問題の枠組みは、プリッダートの「アリストテレスからヘーゲルへ」という枠組みを出発点とし、プリッダート自身が講演においてその前半部分を改めて問題化したことを踏まえたうえで、『射程』出版以降、プリッダートの問題意識を受けとめ、スミスとヘーゲルとを再接続する試みとなるはずだったのではないか。

ひろく社会理論としてヘーゲルを読み解いてきた著者のスタンスに鑑みて、社会と経済の並列はタイトルにふさわしいが、「社会経済思想」という括り方そのものは、一般的に言ってやや曖昧かつ非主体的な印象を抱かせる。だが、本書で示されるヘーゲルの社会思想と

経済思想の有機的結合、すなわちヘーゲルの「社会経済思想」の具体像は翻って、今日的な個別化する学問状況とは逆の方向を照らしているとも考えられる。また、「古典研究は、古典から現代を見る視点と、現代から古典を見る視点の両方を具えなければならない」と高柳氏が言い切っていることにも着目したい。緻密な原典解釈に基づいて提起される現代への問いは、氏の社会意識を媒介としたヘーゲルの現代への接続であり、その意味で『社会経済思想』は、自己完結的な専門書とは異なった性格をもつ。

「ヘーゲルの所有論とマルクス」では、『法の哲学』の第一部・第一章「所有」に焦点が当てられ、スミスやロックらの議論と対照されながら、その具体的論点が整理される。要点が抽出されており、「わかるヘーゲル」という帯の文言を裏切らないが、ヘーゲル所有論の多面性といったような論点霧消状態には陥っていない。最終節が「雇用労働」に割かれていることから、当該論考はヘーゲルの雇用労働論と違って差し支えない。所有論の論理とマルクスへの言及を介して導かれる帰結は、時間的制限および人格の不譲渡を基礎とする雇用労働概念であり、その意図は、現代にまでおよぶ「長時間労働」問題への対峙にこそある。まさに「古典から現代を見る視点」が、ここに体现されている。

「ドイツ古典哲学における結婚と家族」もまた、「現代から古典を見る視点」が随所に提示されている。主題からはやや離れるが、「母親の子殺し」のカント的解釈にたいする見解は興味深い。そこでは世界市民、あるいは人格という言葉とは裏腹に、カントが私生児殺しを肯定してしまうことへの大きな違和感が表明された。

家族は子の自立による分岐を運命づけられ、市民社会においてその絆を失った諸個人へと解体される危険にも晒されるが、市民社会と国家の一基盤は家族にあるという考えをヘーゲルが手放さなかったことを、高柳氏は強調した。ただし「家族がその使命を十分に果たすとき、それは豊かな人間性を育み、安定した個人を市民社会と国家に送り出す場所として、…依然として積極的な意義をもち続けることであろう」との結びは、著者も指摘する虐待やネグレクト、さらにその背景にある貧困といったさまざまな現代社会の現実にもみこまれてしまっていないか。コルポラツィオン論を貧困問題にも引きつけた高柳氏ならではの、より具体的見解に耳を傾けてみたかった。

「コルポラツィオン論のビフォー・アンド・アフター」は、『社会経済思想』唯一の自伝的要素を含むものとして興味深い。初期マルクスに媒介されたヘーゲル像と袂を分かち、コルポラツィオン論における監督・承認論の問い直しを経て、「硬直的なツンフトの復活」回避のヘーゲル的処方箋としてそれを肯定的に評価するに至る道程は、著者の追思惟の過程をその紆余曲折とともに知ることができる。

第2報告(佐山)もまた、高柳氏の業績を振り返り、後進が、氏の遺産と遺志を受け継いで、これから何をすべきか、今後の課題を論じた。

ヘーゲルの『法哲学要綱』は、序文にある「理性的なものは現実的であり、現実的なのは理性的である」という有名な一文ゆえに、長く「現状追認の反動哲学」あるいは「プロイセンの御用哲学」といった非難にさらされてきた。そうした先入観やイデオロギー的な歪曲

から解放され、ヘーゲルの内在的理解が可能になったのは、いくつかの先例を除くと、1960年代以降である。

高柳氏は、1970年前後に登場したリーデルやアヴィネリらのすぐれた法哲学研究にいち早く着目し、アヴィネリの『ヘーゲルの近代国家論』を邦訳するとともに、リーデルのもとに留学して研鑽を積んだ。また、イルティンクらが編集を進める法哲学講義録の意義を認めて、1817/18年にハイデルベルク大学で行った講義の監訳を務めるなど、我が国におけるヘーゲル法哲学研究を名実ともにリードしてきた。「ヘーゲルを彼自身のテキストおよび彼が生きた時代の歴史的コンテクストから理解する」という、社会思想史研究にとって当たり前のことが、我が国のヘーゲル研究においても定着したのは、高柳氏の先駆的業績のおかげと言っても過言ではない。

その一方で、高柳氏が、ヘーゲル法哲学の歴史的・内在的理解だけではなく、その現代的意義の発掘にも心を砕いていたことは、遺著『ヘーゲルの社会経済思想』にも見て取ることができる。この作品は、本来であれば、これまで発表してきた諸論考に手を加え、『ヘーゲル社会理論の射程』（2000年）に続く第二の主著になるはずのものであったが、氏の急逝により、諸論考がそのまま収録され、「遺稿論文集」として刊行されることとなった。

高柳氏に導かれて研究を進めてきた我々後進は、氏亡き後、今後どのように研究を進めていくべきであろうか。現在は、高柳氏が研究を始められた時と比べると、厳密なテキストクリティックにもとづく著作・講義録が出揃い、専門的に研究するには非常に恵まれた状況である。しかし、その反面で、ヘーゲルに強い関心を寄せているのは、もっぱら専門の研究者で、ヘーゲルの法哲学も、今日の政治哲学あるいは社会理論のアクチュアルな議論からは、ほとんど忘れ去られている観がある。

かつてヘーゲルの思考がアクチュアリティをもっていると広く信じられていた時代には、多くの人がヘーゲルを学ぶための労を惜しまなかった。しかし、報告者が見るかぎり、現代はもはやそうした時代ではない。それゆえ、ヘーゲルの議論が今なお有効であることを示すには、ヘーゲル研究者が、ヘーゲルの思考と概念を現代の政治哲学あるいは社会理論の文脈に「翻訳」する、換言すれば、現代的議論のなかでヘーゲルの立ち位置を明らかにする必要があるように思える。

200年近く昔に書かれたテキストを、「時代遅れ」といって現代的観点から安易に裁断することなく、現代の我々が理解可能な形に「翻訳」し、その内実を現代化することは、決して容易ではないだろう。しかし、こうした作業こそ、ヘーゲルの目を通じて現代を読むと同時に、現代の目からヘーゲルを読もうとした高柳氏の遺志を受け継ぐことになるのではないだろうか。

以上 2 報告による高柳氏の著書の内容紹介、およびその研究史上の意義への言及を受けて、討論者はコメントし、これまでの個人的交流の中で感じ取ったことを以下のように付け加えた。高柳氏とはヘーゲル研究会（現、日本ヘーゲル学会）で出会った。高柳氏は当時の若手研究者の中でも、法哲学関係のまとめ役であった。若手の活字となった論文に対して、

じつにいていねいなコメントを施して、研究水準と意欲を高めようとされた。テキストと丹念に向かい合うスタンスは、後進にとって、襟を正させるものであった。また高柳氏は、思想史の研究者たちで作る古典読書会で古典に親しみ、幅ひろい素養を身につけていた。シヴィックな精神、これは研究の上でも生活の上でも生きていたと思われた。地域公民館での輪読会、児童の登下校時の見守りなど、ほほえましいお話しに心ひかれた。

フロアからの指摘で特筆すべきは、高柳氏の社会思想史学会における功績の大きさからして、セッションへの出席者が少ないというものである。これに関しては、今後のセッション運営における課題として共有された。